

サービス・ラーニングを通じた「よき市民」への学び — 地域社会参加(地域に根ざした福祉)科目の実践事例から —

向井 一朗

キーワード：フィールド教育、サービス・ラーニング、地域社会参加、よき市民への学び

概要

桜美林大学基盤教育院フィールド教育部門では、国内プログラムとして「地域社会参加」科目を実施している。この科目では、学生が、地域社会のさまざまな課題やその課題を巡る人々に出会いながら、よき市民としての学びを得るための多様なプログラムが用意されている。

桜美林大学では、2012年度からサービス・ラーニングを導入しており、2013年度よりすべての地域社会参加科目は、サービス・ラーニングの手法を取り入れている。

本稿では、地域社会参加科目として筆者が担当するプログラムの内、「地域に根ざした福祉」の2012年度及び2013年度の実践事例から今後の桜美林大学でのサービス・ラーニングの展開に資する提言を試みた。

はじめに

桜美林大学フィールド教育デパートメント作成の学生向けパンフレット「Field Studies 2013-2014」では、サービス・ラーニングを「[大学での授業]と「フィールド活動」を両輪にして動く学習」手法とし、「現実社会を体験し、他者と対話し、共感し、また自らも働きかける能力を備える」ことを目的としている。

桜美林学園は建学の精神に則り、よりよい社会を創るために「学而事人」を実践する、キリスト教精神に基づいた教養豊かな国際的人材の育成を目指している。サービス・ラーニングはこのような人材を育成するうえで非常に有効な教育手法であるといえるが、桜美林大学では2013年度から全学でサービス・ラーニングの導入が始まったばかりである。

筆者自身のサービス・ラーニング科目(以下、SL科目)実践事例を通じ、桜美林大学での今後のサービス・ラーニングの展開について考察したい。

1. 桜美林大学におけるサービス・ラーニング

桜美林学園は創立以来、キリスト教精神に基づき「学而事人(がくじじじん)」、学んだことを通して人に仕えること、そして国際性を自然な形で実行することのできる人材の育成を目指している。

この建学の精神に基づき、桜美林学園では現在、2021年の学園創立100周年に向けて、自己を高め、自己の責任を果たしうる人材を育成するために、以下の長期ビジョンを設定している。

1. この学園に学ぶ者が、「学而事人」の精神のもとに、自らが持てるものの5%程度を社会貢献に捧げる人となるような教育を行う。
2. 更に彼等が、常により高いレベルを目指すように導き、半数程度はいずれかの時点で大学院への進学を志向する教育を実践する。

このような方針に基づき、桜美林大学では2011年4月に基盤教育院にサービス・ラーニング・センター(以下、SLC)が発足し、2012年度には基盤教育院「地域社会参加」科目として4つのプログラムをSL科目として立ち上げた。

2013年度からは、基盤教育院フィールド教育デパートメントのフィールド教育国内科目である「地域社会参加」の9プログラムをすべてSL科目化した。同時に、基盤教育院他のデパートメント及び学内の4学群すべてでSL科目を立ち上げ、2013年度には全学で29のSL科目を実施している。

2. 基盤教育院フィールド教育 SL 科目「地域社会参加」

2.1 地域社会参加科目の SL 科目化

地域社会参加科目は、サービス・ラーニング導入以前から実施されていたが、従来の地域社会参加科目の7プログラムに加え、2012年度に、「わたしたちに身近な貧困」「災害支援とボランティア」「地域に根ざした福祉」「地球にやさしい食と農」の4プログラムをSL科目として新設した。2013年度には既存のプログラムを9プログラムに整理し、そのすべてをSL科目として実施している。筆者は「地域に根ざした福祉」（春学期実施）「地球にやさしい食と農」（秋学期実施）の2プログラムを立ち上げ時から担当している。

SL科目として地域社会参加を実施するにあたり、何を目指して、どのような手法で科目を実施するのか、担当教員間で以下のような共通認識を形成した。

1. SL科目としての地域社会参加の目標

地域社会参加科目は共通して以下の点を学習の重要なポイントとする。

- (1) 授業外学習で行うボランティア等の活動を通じて、地域とそこに住む人々と関わり、地域の問題解決に何らかの貢献をする。
- (2) 地域での活動を通じて、地球市民としての意識、感受性、人間力、行動力を養う。

2. SL科目としての地域社会参加科目の手法

通常の講義以外に、フィールドでの20時間以上の実習を行う。

同時に、科目の共通理解を促進するため、表1・2に示す通り、サービス・ラーニングによる学習到達目標(案)を作成した。「よき市民」への学習を具体的に6つの学習目標としてあらわし、それぞれに「SL入門」「SL基本」「自ら行動するSL」「学生リーダーとしてのSL」の4つの到達目標を設けた。

2.2 サービス・ラーニングより「よき市民」への学びの道筋

サービス・ラーニングによる人材育成の目的は、単に知識や技術を身につけることにとどまらず、「よき市民」として行動する姿勢や行動力を身につけることである。この目的を、学生が単に1度のSL科目を履修することで達成することは難しい。学士課程の4年間を通じて繰り返しサービス・ラーニング手法による学びを体験することで、初めて学生の行動変容が達成されると考える。表1・2に示す学習到達目標は、このような考えに基づき、教員・学生に学士課程4年間を通じたサービス・ラーニングによる市民学習の道筋を示すと同時に、各教員が担当する地域社会参加科目が、どのような役割を果たすのかを明確にすることを目的としている。

基盤教育科目である「地域社会参加」は、全学群の全学生が履修可能であり、新入生を

表1 サービス・ラーニングの学習到達目標(入門レベル・基本レベル)

市民学習の目標	SL 入門	SL 基本
<p>(1) 市民としての権利・義務の学習</p> <p>投票、納税(年金なども含む)が必要であることへの理解。市民運動・活動が普通に感じられる認識を持つこと。政治に関心を持つこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の行政の仕組みと働きを知る。 ・地域の行政の動きが、地域の課題解決や「私」の暮らしに大きな影響を与えることを意識し、その動きを情報収集する方法を知る ・また「私」に、地域の行政のあり方に少なからぬ影響を与える権利・義務があることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の仕組みと裏づけとなる法の働きを知る。 ・法の枠組みが、地域の課題解決や「私」の暮らしに大きな影響を与えることを意識し、その動きを情報収集する方法を知る ・地域の行政・司法・立法をよりよい方向に動かす市民運動や市民活動があることを知り、その具体的な動きを知る。
<p>(1) 社会の中の多様性の学習</p> <p>日本社会には多様な文化があること(特に外国人問題)の認識と少数派の意見の尊重が重要なこと、その理由の理解。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の多様な人々の中には、「弱い立場」の人たちがおり、その人たちが「痛み」を感じていることを理解し、また自らの偏見に気がつく。 ・地域の「弱い立場」の人たちの「痛み」を理解する。 ・地域の中に、在住外国人や貧困にあえぐ人々など多様な人々がいることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「弱い立場」にある人々は、自らの責任で弱い立場になってしまったのではなく、実は持っている能力を発揮する機会を奪われた「弱められた人々たち」であることを理解する。 ・人々の偏見を生み出す社会の構造を理解する。 ・「痛み」の原因と「私」とのつながりを理解する。
<p>(1) よき支援者になるための学習</p> <p>助けることも、助けられることも普通にできる態度を身につけること、その際の好ましい態度や認識(援助の倫理、要援助の倫理)を身につけること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら積極的に他者とのコミュニケーション(発信・受信)が行える。 ・コミュニケーションを通じて、他者を理解し、自分を理解してもらう努力を行える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の意見を尊重する姿勢を身につける。その上で、他者の意見を傾聴することができるようになる ・「自尊感情」の概念を理解し、お互いの自尊感情を高めるようなコミュニケーションを行う。 ・対人支援を行う上で「やるべきこと」「してはいけないこと」を学ぶ
<p>(1) 市民社会の果たす役割の学習</p> <p>問題解決に当たるのは政府や企業だけでなく、市民社会も重要であると認識し、自らが市民の一人として関わる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題とその課題の解決に取り組む関係者や団体があることとそれらの活動内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題の解決に取り組む夫々のアクター、特に市民社会の意義・役割、問題点や限界を知る。 ・地域の課題の解決に取り組むアクター(行政、企業、市民社会)間の役割分担と関係性を理解する。
<p>(1) リーダーシップの学習</p> <p>自分でもリーダーシップの一端を担うことができるという自信、また担うための方法論を身につけること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市民活動は、自らの意思で、自らの積極的行動で成り立っていることを感じる。 ・地域の市民社会に参加する体験を通じて、自ら地域社会の課題に気がつく。 ・自ら気付いた課題に対し「なんとかしなくては。」という姿勢が醸成される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら進んで地域の課題の現状や解決のために働く人々・団体を知る努力をする。 ・実習などで、「指示待ち」ではなく、自ら進んで行動する。 ・学生チームや、実習先の人々とのチームビルディングに積極的に参加する。
<p>(6) 責任ある市民になるための学習</p> <p>将来職業人として職業倫理を守る人間となること。職業を離れて一市民(素人)として社会問題に関心を持ち、他人任せではない責任感を感じることが出来るようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会には、さまざまな意見や立場、「正しさ」の主張があることを知り、それらの主張の根拠や正しさを理解する。 ・社会正義の重要性を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの立場や正義感を考え、異なる立場や正義感との対話が可能になるような自らの主張の根拠や論理展開を身につける。

表2 サービス・ラーニングの学習到達目標（自ら行動するレベル・学生リーダーレベル）

市民学習の目標	自ら行動する SL	学生リーダーとしての SL
<p>(1) 市民としての権利・義務の学習</p> <p>投票、納税（年金なども含む）が必要であることの理解。市民運動・活動が普通に感じられる認識を持つこと。政治に関心を持つこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の仕組みと議会政治の働きを知る。 ・地域や国の政治の動きが、地域の課題解決や「私」の暮らしに大きな影響を与えることを意識し、その動きを情報収集する方法を知る ・また「私」に、地域の政治の動きに少なからぬ影響を与える権利・義務があることを知るとともに、納税などの市民としての義務や投票などの市民としての権利の行使を行動に移す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生リーダーとして、自らが、市民運動や市民活動に参加する。 ・自らが参加した市民運動や市民活動がどのような結果をもたらしたのか評価できる。さらには評価結果をフィードバックし、次に取るべき行動を自ら計画する。
<p>(1) 社会の中の多様性の学習</p> <p>日本社会には多様な文化があること（特に外国人問題）の認識と少数派の意見の尊重が重要なこと、その理由の理解。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の解決にあたり「平等」なことが必ずしも「公平」ではないことを理解する。 ・「多数決」を行うには、必ず「少数意見の尊重」を行うことが民主主義の根本的なルールであることを理解する。 ・周囲の人々の偏見を和らげるために努力する。 ・地域の「弱められた」人々とともに、課題解決に向け活動に参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生リーダーとして、地域の「弱められた」人々とともに、課題解決に向けた活動を計画し実行する。 ・自らが計画実行した活動の結果を自ら評価し、その教訓を見出す。 ・自らの活動の評価結果に基づき、新たな活動を計画する。
<p>(1) よき支援者になるための学習</p> <p>助けることも、助けられることも普通にできる態度を身につけること、その際の好ましい態度や認識（援助の倫理、要援助の倫理）を身につけること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会活動などで、お互いを尊重する姿勢を身につける。 ・対人支援を行う上で「やるべきこと」「してはいけないこと」に配慮しつつ、積極的・主体的な行動ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生リーダーとして、他の学生に対し、お互いを尊重する行動や活動へ向けたアドバイスを行える。 ・学生リーダーとして、周囲の人々の偏見を低くするよう配慮し、行動する。
<p>(1) 市民社会の果たす役割の学習</p> <p>問題解決に当たるのは政府や企業だけでなく、市民社会も重要であると認識し、自らが市民の一人として関わる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題の解決に取組むに当たり、一人の市民として地域社会に参加するための自己犠牲の意義と喜びを、実体験を通じて学ぶ。 ・地域社会活動への参加を通じ、自らが現場での活動計画立案から事後評価までのプロセスを習得する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生リーダーとして、他の学生に対し、市民社会の果たす役割、重要性、また参加の方法を伝え、促進することができる。
<p>(1) リーダーシップの学習</p> <p>自分でもリーダーシップの一端を担うことができるという自信、また担うための方法論を身につけること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会活動などで、自らが課題を発見し、その解決に向けて行動を計画できる。 ・地域社会活動などで、自ら計画した行動・工夫の実現に向け学生チーム内や、実習先の人々に積極的に提言し、説得できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生リーダーとして、自らの行動計画をもとに仲間を集めて活動を実施できる。 ・自らが計画実行した活動の結果を自ら評価し、その教訓を見出す。 ・自らの活動の評価結果に基づき、新たな活動を計画する。

含む学生が大学で初めてサービス・ラーニングに触れる機会になり得る。このため、2013年の地域社会参加科目は、基本的に表1の「入門レベル」を想定して設計されている。

なお、2013 年度の地域社会参加科目は、可能な限りこの到達目標（案）を活用した学生の学びの評価を行うよう試行している。学生の学びの評価は、共通到達目標に基づいた評価の他、各プログラムの学習テーマ（貧困、地域福祉など）の理解度、活動への参加状況などを加味して行う。しかし、ここで留意しなければならないのは、SL 科目の目標は、地域社会に参加して活動することそのものではなく、あくまで地域社会での実体験を通じてよき市民への学びを得ることである。学生の学外活動への参加の積極度のみでは、必ずしもよき市民への学びの評価にはつながらない。

3. 2012 年度「地域社会参加」（地域に根ざした福祉）の実践から

3. 1 プログラムのコンセプト

地域社会参加（地域に根ざした福祉）は、桜美林大学で初めての SL 科目の一つとして企画実施された。本プログラムは、健康福祉学群の実施する「プロフェッショナル・アーツ」としての福祉教育との仕分けを意識し、高度な専門性がなくても一般の人々が参加できる

2012 年度地域社会参加（地域に根ざした福祉）科目 概念図

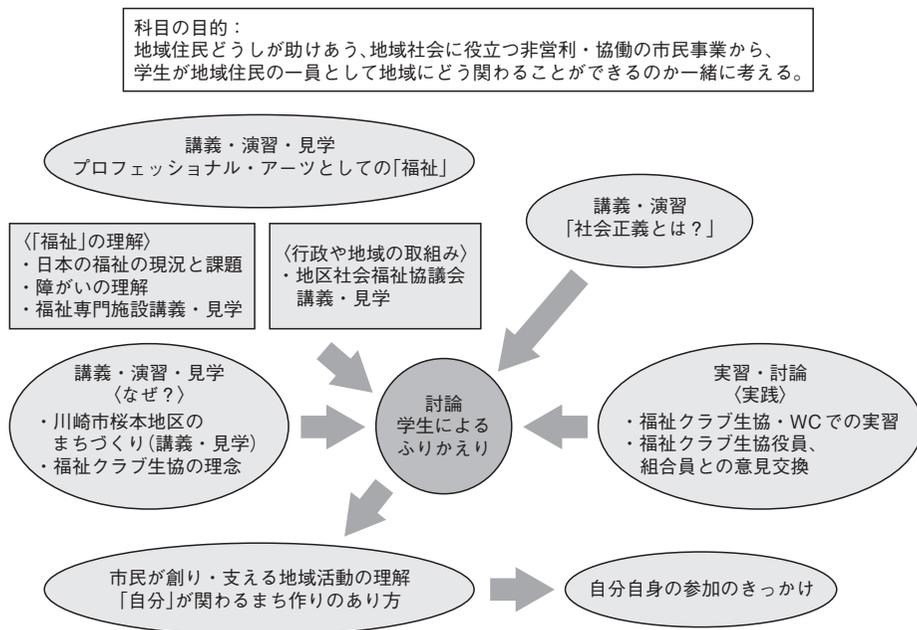


図 1 2012 年度「地域に根ざした福祉」基本コンセプト

福祉をテーマとするよう企画した。

本プログラムは、福祉についてほとんど専門的な知識のない学生を対象と想定し、プロフェッショナル・アーツとしての福祉の大まかな理解から始めた。その上で、地域に暮らす人々の多様性、またそれらの人々を巡って「社会正義」とは何かを考えながら、後半で福祉クラブ生協での最低20時間の実習を行った。

初めての試みであったこともあり、学生が福祉クラブ生協の現場で実習するに当たり、プログラムの流れは、「準備」→「実習」→「ふり返り」→「体験から学習へ」とのステップを踏んだ。プログラム企画の段階では、特別な準備なしには、現場体験が学生からの一方的な体験の収奪になってしまい、地域社会への貢献ができないのではないかと危惧を持っていたからである。ある程度の姿勢や行動力なしには、福祉サービスの対象者はもちろん、実習を指導するスタッフにも迷惑がかかるのではないかと不安があった。また、福祉クラブ生協もこのような形で大学生の実習を受け入れることが初めてで、同様の不安を抱いており、実習までに十分な準備をするように大学側に申し入れを受けたこともこのようなプログラム構成をとった理由である。

3. 2 学生の学び

最終授業で行った、学生の自己評価アンケートの結果を以下に抜粋する。

1. 訪問・講義などを通して印象に残ったことベスト3

(福祉クラブ生協) ・仕事にやりがいを感じている姿。(×2)

(青丘社) ・日本の中で人種差別がまだある。－異文化に興味を持って勉強していたのに、こういった問題に気付けなかった。

(共働学舎) ・障がい者の方々は「生きているのが仕事」という言葉。

(健康福祉学群による講義・実習) ・今まで障がいを持つ方にどう接してよいのかわからなかったのが、お話を聞くことができて本当によかった。

(そのほかの講義・演習など) ・「正義」「社会正義」とは何か？－今でも胸に残っている！

(全般) ・市民団体の運動と交わり。 ・訪問先での出会い。

2. 気づき・学び

・認知症を持っている方でも、お互いを思いやる気持ちは忘れていないおばあちゃんの姿。
→私ももっともっと人に優しくしたいと思えた。

・福祉は、お年寄りや障がい者の方のためだけにあるものではなく、困っているすべての人が利用できるものであるということ。

・放っておけないという気持ちが様々な行動を起こさせている。

・福祉も国際協力と同じで、福祉は福祉に従事することではなく、親切な心遣いのできる人が偏りなく、もしくはみんなが、時には支え、時には支えられるような社会を社会の一員

として達成してゆくことだと思った。

- ・言葉や本などで見聞きすると、どうしても空の上のような事柄を、実際に築きあげてきた方々に直接お話を聞いて、同じ場所で実習や見学をさせてもらったことが、すごく力をもたらえました。「福祉」と枠組みしていても、それは本当に生活の一部で、誰もが関わっていて、誰もが持っている気持ちから派生していること、そう考えると本当に身近なものだったということに改めて気付かされました。

3. 自分の中の変化(科目を履修する前後で)

- ・福祉に関する興味・関心が増えた。
- ・人と出会うことがもっと好きになった。
- ・資格がなくても関わるができる。
- ・福祉を必要としている方々への接し方が変わった。今までは、何が必要だろう、どうしたらいいんだろうと常に考えていたけど、普通に接していいんだということを実習から教わった。そして普通に困っているときだけ手を貸せばいいということもわかったので、これから福祉に関わることがあったら、気軽に参加できるような気がする。
- ・市民団体の存在や、「弱い立場にある人」の存在など、交わることのなかった人々との出会い。
- ・実習先の人たちはこんなにも地域にかかわっているのに、私は自分の地域に何もしていない。もっと地元にかかわりを持って支えて行きたいな。
- ・3年になって就職を考え始め、なんとなくのイメージ(バリバリ働いて出世したい)や理想があった。それは現在でも残っているが、このような分野でゆっくりのんびり働くというのも一つの選択だと思った。働くことに対して、疲れそうとか、大変そうというネガティブなイメージが多く、ずっと学生でいたいと思っていけど、ワーカーズ・コレクティブのお母さんたちと触れ合って、こんな風にわたしも生き活きと仕事がしたいと思うようになった。
- ・自分も市民の一人として、これから関わって行きたい。そのヒントもGETした!! という気持ちです。

プログラム実施の結果、企画段階の不安は杞憂に過ぎず、学生たちはそれぞれが大きな学びを得ると同時に、実習受入先の福祉クラブから、非常に高い評価を得ることができ、履修学生のうち2名に福祉クラブから熱心な就職のお誘いをいただいたほどであった。

一方、当初に設定していた学習到達目標6項目それぞれの自己評価は、以下のようになった。

科目到達目標	自己評価(5点満点)
1) 地域の問題解決に当たって、行政や企業だけでなく、地域に根ざした市民団体の果たす役割を理解する。	平均 4.1
2) 地域に暮らす人々の中で、その置かれた状況が様々であることを理解する。特に、地域の中で弱い立場にいる人々の「痛み」に耳を傾けることの大切さを実感する。	平均 3.9
3) 市民団体が地域の問題に積極的に関わるには、行政との共働が必要であることを理解し、市民団体が行政にどう働きかけるのか理解する。さらには「私」自身と行政・地域の政治のかかわりについて考える。	平均 3.1
4) 実習などを通じて、自ら率先して行動する習慣を身につける。	平均 3.1
5) 「弱い立場にある人」「弱められた人々」と接するときに、「してはいけないこと。」「すべきこと。」は何かに気付く。可能であれば、そのような態度を自分のものとして身につける。	平均 3.5
6) 地域に暮らす1人の市民として「私」を自覚し、地域で起こっている問題を見る視線と、その問題を「他人事」ではなく「自分ごと」として受け止める感性を磨く。	平均 3.8

3. 3 2012年度実践事例からの課題

科目担当教員としては、学生たちの自己評価は比較的厳しいものではないかと感じた。特に印象に残ったのは、「4) 実習などを通じて、自ら率先して行動する習慣を身につける。」に付された以下のコメントであった。

・実習中は、目の不自由な方にはこうしたほうが…、福祉クラブの活動では、こういうことに気をつけて活動するというをよく理解し、実際に行うことができていると思う。しかし、いざ普段の生活の中で困っている人を見かけても、声をかける勇気がなく、手を差し伸べることができない。これは、未だ自分が、実習の中でそういう行動を身につけることができているということなのだと思う。これからも自分で身につけて行きたい。

1科目の半年間の範囲では、さまざまな学びを得ることができるが、それを「身につける」にはやはり時間がかかることを示している。

また、「3) 市民団体が地域の問題に積極的に関わるには、行政との共働が必要であることを理解し、市民団体が行政にどう働きかけるのか理解する。さらには「私」自身と行政・地域の政治のかかわりについて考える。」に関連しては、以下のようなコメントが印象に残った。

- ・市民団体は、誰かが立ち上がり、多くの人々で短い時間でも支えあいながら成り立っているのだということ、そして、行政団体に意見書など提出したり、話し合ったりして運動していること、そして常によくしようと考えている姿が見えた。「私」自身としては、まず自分の地域の市民団体について知ることが大切だと思った。
- ・市民が政治を動かすという数少ない活動について知ることができた。しかしまだまだ先にも述べたとおり、不十分な部分もあり、積極的なかわりの困難さを知った。だけど、このような素敵な活動がもっと広がるために、行う人へのインセンティブがちゃんと与えられるようになる必要がある。

当初は、2013年度から導入された学習到達目標にあるように、市民としての権利や義務に気づくところまで考えていたが、そこまで到達することができず、上記の3)、4)の2項目は、他に比べ比較的自己評価が低い結果になった。

市民の権利と義務に関しては、2012年度の秋学期に実施した「地球にやさしい食と農」プログラムでは、国政選挙の実施と時期が重なり、多くの学生たちが、現在の社会の状況を変えるのに、選挙を通じた政治への働きかけが必要であると強く意識したことも印象深い。

また、本プログラムを受講した学生の複数のものが、このプログラムをきっかけに健康福祉学群の「地域福祉」などの専門科目を受講した。その内1名は、国際協力専攻であるが、2014年4月から福祉施設に就職することが決まっている。また別の1名も、国際協力専攻のゼミ論文のテーマとしてフィリピンにおける障がい者福祉を考えるなど、本プログラムを受講したことを一つのきっかけに、積極的に行動しようとしていることは大変うれしいことである。

4. 2013年度「地域社会参加」(地域に根ざした福祉)の実践から

4.1 プログラムのコンセプト

2012年度の本プログラムの履修者は9名だったが全員がリベラル・アーツ学群の学生であり、「プロフェッショナル・アーツ」としての福祉をよく知らない学生を対象としたプログラムは有効であった。

これに対し、2013年度は6名の履修者のうち2名が健康福祉学群社会福祉専修の3年生と4年生であり、このコンセプトでプログラムを実施することの是非を再検討する必要があった。他の履修者4名とも含め学生とよく話し合った結果、本プログラムで扱う「福

祉」を「高度な専門性がなくても一般の人々が参加できる福祉」から「人々が社会で幸せに暮らすこと。」として意義付けることで、プログラム内容を見直し、図2のような概念とした。

健康福祉学群に所属しない学生たちはもちろん社会の中でさまざまに弱められた人たちがいるそのものに気がついていない。一方で、プロフェッショナル・アーツとして社会福祉を学ぶ学生たちも、在住外国人や野宿者、被差別部落、元ハンセン病患者などの問題に直面する人々に直接出会い、話を聞く機会が多くはない。そこで、すべての人が生まれながらに等しく持っている人権が尊重され、それぞれの幸福を追求しながら暮らすことや、そのためにわたしたち一人ひとりが関わられることを考えることをテーマの中心とした。

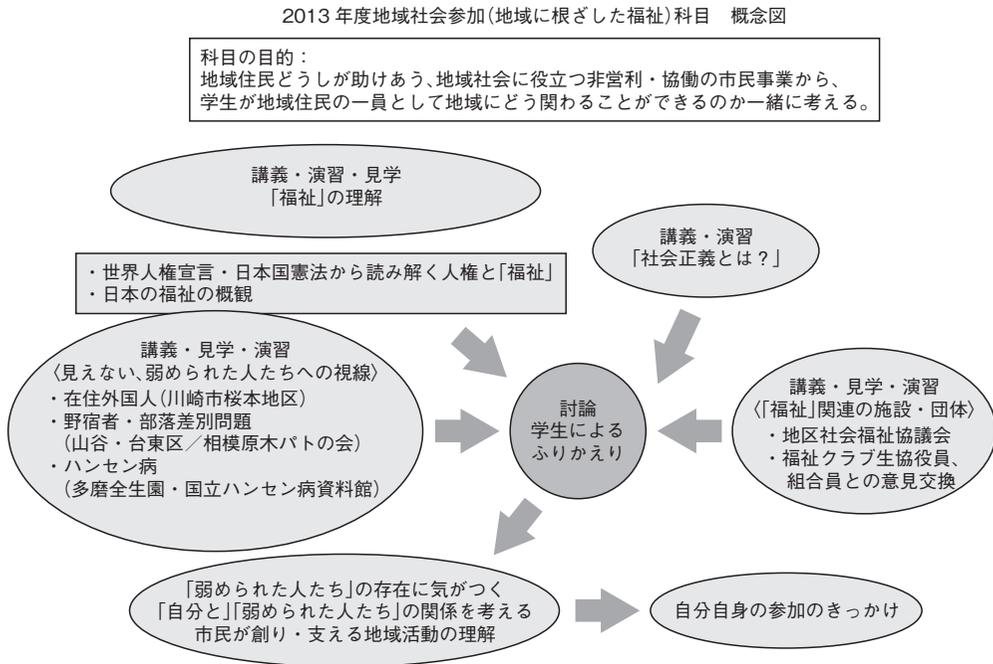


図2 2013年度「地域に根ざした福祉」基本コンセプト

4.2 学生の学び

最終授業で行った、学生の自己評価アンケートの結果を以下に抜粋する。

- ・自分自身が持っていた福祉の概念の狭さに気づかされた。
- ・福祉というのは、普段から自分のすぐ横にあるかわりそのものであることに気づかされた。
- ・当事者が抱えている問題を当事者から聞けて勉強になった。

- ・人々の多様性と弱められた人々の「痛み」を当事者が語ることの意義の大きさを感じた。
- ・本当の意味での共感はできないかもしれないけど、当事者の気持ちを考える姿勢が大切だと感じた。
- ・地区社会福祉協議会の見学をきっかけに自分の住んでいる地区の社会福祉協議会に足を運んでみた。
- ・最近、地域のつながりが本当に素敵だと感じている。わたしたちは一人では何もできないけどみんなが協力したらいろいろなことができたり、人とのつながりが広がったり、いろいろな人ともっともっと関わって行きたい。
- ・実際に会って話をしたら、私たちと何の変わりもない、差別する必要がない人々だということを実感した。
- ・野宿者を保護する会・活動があることに正直驚いた。この講義を受けるまで、野宿者の方をプラス面から考えたことがなかったので、わたしにとって今までになかった新しい考え方・見方でした。
- ・今まで自分が捉えていた「福祉」は、主に高齢者を対象としていたが、今回、福祉とはもっと広い門で、さまざまな分野があることに気づかされた。思っていたよりも非常に多くの問題を抱えていたこと。一番ひどいのは「無関心」であること。まず自分ができることはその問題について知ろうとすることだと気づいた。
- ・ほとんどのみなさんが、“自分の立場だったらこうであってほしい。”という思いで行動していた。これからは、「私」を自覚し、地域で起こっている問題を見る視線と、その問題を「他人事」でなく「自分事」として受け止める感性を磨きたい。
- ・ただ隠すだけじゃなくて、それなりの対応も大切だと思った。自分たちが率先して困っている人の手助けをすることでみんなが住みやすくなる社会になるんじゃないかと思った。
- ・地域の人たちの役に立ちたいと思って、地域で協力できるのはすごい行動力だと思った。

4. 3 2013年度実践事例からの課題

2013年度のプログラムでは、今まで見えなかった人々の痛みを「知る」ことを中心課題としたため、実習の解釈も広く取った。2012年度のプログラムでは、同じ実習先で繰り返し同様の作業を一定時間続けることを「実習」と位置づけたが、2013年度では、さまざまな人に会い、その人たちに寄り添って「聴く」ことを実習と位置づけた。

学生の要望に応じてプログラム内容を変更した際、「実習」が反復作業を主とするのではなく、さまざまな人たちから話を「聴く」ことを主としたため、このことが学生たちの学びにどのような影響を与えるのかが不安であったが、健康福祉学群の学生であるかないかの別なく、2012年度同様の大きな学びを得たようである。

この実践事例から、作業するのみならず、「寄り添い、聴く」ことも実習の一つとして位置づけられるのではないかと考察する。ただ、課題して挙げられるのは、訪問先が多様

になるこのような「聴く」ことを中心とする今回のプログラムでは、担当教員である筆者がすべての訪問先に同行し、学生の実習の現場での督励を行った。通常の講義時間に加え20～30時間以上の実習を義務付けるサービス・ラーニング手法では、担当教員の負担が多いことが課題となっている。このタイプの「実習」を導入した場合に、担当教員の負担の軽減をどのように行うのかが、今後の課題ではないかと考える。

5. 今後の桜美林大学でのサービス・ラーニングの展開

サービス・ラーニングによるよき市民への学びのための学習到達目標を設計した際に検討され、さらに2012年度の実践事例からも考察できるように、本学の建学の精神に基づいた「学而事人」を社会で実践する人材を育成するためには、単に1回のSL科目の受講では十分効果的であるとはいえない。

知識や技術に加え、姿勢や行動の変容を目指すサービス・ラーニングの効果を十分に発揮し行動の変容を促すには、繰り返し学ぶ機会を得ることが重要である。このため、現在の基盤教育科目である地域社会参加をひとつの入口と位置づけ、ここで学生が得たきっかけを継続した学びにつなげ、行動の変容へと導く仕組みづくりが必要であろう。

このような継続した学びは、授業としての教育活動でも課外活動でもどちらでも得ることは不可能ではない。しかし、例えばボランティア活動などの課外活動をただ継続すれば良いというものでもない。社会での体験から学びを得ることこそがサービス・ラーニングであり、その点において単なる社会奉仕とは一線を画するものである。

今後は、より多くのSL科目が学内で導入されると期待するが、それと同時にSL入門から学生リーダーへの学びの筋道を学生に示す必要があるだろう。今後、地域社会参加科目と他の基盤教育科目や専門教育科目との連携を強化し、学士課程の4年間を通じてサービス・ラーニングを継続できる環境整備が焦眉の急である。

また、このような連携の下、地域社会参加科目も現在の入門編から基本編までの多様なレベルのプログラム提供が望まれる。過去2年度にわたる地域に根ざした福祉プログラムの履修者16名の内、半数以上の10名が再び地域社会参加科目を履修していることから、学生への多様なプログラムの提供のニーズは十分あると考察する。

さらには、2013年度の地域に根ざした福祉プログラムの実践事例から、学生が最もはじめに地域の問題に出会う機会として、「出会い、耳を傾ける」プログラムが一つ用意されていてもよいのではないかと感じる。2014年度の地域に根ざした福祉プログラムは、2013年度同様のプログラムを軸に検討したいと考える。

一方、課業としてのSL科目の受講に、教員のマンパワーや学生による履修単位数の制限など様々な制約があることから、学生への課外の地域社会活動の紹介も重要である。ただし、このような場合に、SL科目ほどではないが、学生の地域活動を見守り、適宜学びを促すような人材の配置も必要であろう。フィールド教育部門 SLC のスタッフがこのような機能を担うことが期待される場所であるが、現在の人員体制では、このような機能を果たすことができない状況にある。全学的にサービス・ラーニングに取り組む環境づくりが求められる。

引用(参考文献)

桜美林大学基盤教育院フィールド教育部門(2013)「Field Studies 2013-2014」

桜美林大学の長期・中期目標 ウェブサイト閲覧(2013年9月30日)

http://www.obirin.ac.jp/jf_oberlin_education/jf_oberlin_message/mid-term_plan/index.html

桜美林大学基盤教育院サービス・ラーニング・センター(2013)「桜美林大学基盤教育院サービス・ラーニング・センター 2012年度報告書」